

2016東京夏季研修会講演(8月21日)

田中鳳柳先生「古典～いつやるの? 今で書論」(完全版)

私は、産経国際書会の設立準備から関わり、本年で35年になります。第1回展の図録を見ると、昭和59年4月13日発行となっており、遠い昔のような気がします。当時は私も50歳の働き盛りでしたから、何かと重宝にイベント企画その他について参加をしたわけです。現在は、私の同期で知った人たちはほとんど退かれ、新旧交代の時期が来ていると思います。本日の出席者が書会の中心になるようご協力をお願いする次第です。現状に満足することなく、ともに手を携えて頑張っていきましょう。

7月下旬に第33回の産経国際書展が終わりました。後発と言われながら、作品内容の向上に向け努力した結果が見えたでしょうか。新聞社系列で、毎日、読売に次ぐ三大展として誇れる内容でなければなりません。現在、これらの出展でも個性的な作品がなく、師の顔が浮かんでくるような内容の作品でばかりでは、展覧会を開催する意味はありません。この傾向は三大展だけでなく、師の手本による作品作りが主だと言われる日本の書壇の仕組みに起因しているように思います。ここに、臨書の必要性や重要性が浮上してくる理由があります。

私が書を始めたのは、60年も前になりますが、当時の書壇を思い返してみると、仮に先生のお手本であっても、展覧会には他人のものまねは出品できず、臨書による個性的な作品が求められました。のちに出てくる背臨とは、こういうことを言ったのかもしれませんが。こうした考え方で社中展、グループ展があり、一番上に日展があったのです。当時、日展は美術の最後の挑戦をする展覧会で、書家と呼ばれる人が集中して出品、入選を競う展覧会でした。こうした状況の中では、「俺は今年の日展は、誰々を臨書して連綿を中心とした作品を出す」とか、「我々は古典を徹底的に研究して楷書の作品を出す」というよう言葉がお互いに交わされていました。

それでは、どの段階から古典の取り組みをすればいいのでしょうか。法帖を見てもとっつきにくい雰囲気があります。

古典を自分のものにするには時間がかかります。時間の蓄積が必要なのです。ここに存在するのは熱意のみです。そして少しずつ良い古典との取り組みを増やしていくことです。

一言で言うと、書の学習は古典の学習です。「古典～いつやるの？
今で書」というのは、事務局で考えたタイトルですが、まさに今の
書会に求められている問題を含んでいます。

この問題は、学習の一番重要な部分だと思います。そして現在も、
書会がそれに真剣に取り組む時期だと思います。多くの古典との出
会いは、その書家の芸域を広め、豊かな発想をもたらすでしょう。

ただ、結果のみえない自分との戦いは苦しいものです。作品に成
果として出るには時間がかかります。グループで競うのも一方法だ
と思います。一つの古典を追求していくうちに、何か手応えがある
かもしれません。

古典や臨書や法帖という言葉聞いたことがあると思います。諸
橋轍次先生の大漢和辞典を調べてみました。古典とは何か。古の、
古いものですね。古法度。法律の法に度々という字を書きます。古
の法度。古の大切な書物。または古代の典籍。古代において行われ
て後世の模範となる書物のことを古典といいます。そして、臨書と
は、手本を見て書くこと。臨は写す。手本のみを間近に置き、これ
を見つつ、学び習うことを臨書といいます。臨書とは、今申し上げ
たように古人の名蹟を見て学習するものです。臨書には、形臨、意
臨、背臨という言葉があります。形臨は、主として点画、ディテール
を客観的にまねることをいい、意臨は主として筆意や情性を客観
的にくみとることを指します。背臨は、習いこんだ古典を見ないで
字形や用筆、章法などを再現することです。以上のうち、意臨と背
臨は、自分の個性との戦いで、臨書作品としての最も重要な部分に
なります。形臨から入り、臨書しているうちに意臨や背臨に入っ
てくる。形臨から臨書作品への段階は重要で、慣れるまで反故を重ね
ることです。結果は背臨になると思いますが、臨書する人の個性が
重要になる稽古だと思います。臨書の作品は、古典の徹底した背臨
が可能になることも目的にやりましょう。

次に法帖ですが、法とは規範、帖は簿冊の意味で、法書を石にま
たは木に模刻し、手本や鑑賞用として剪装本にしたものを言います。
型を取る事ですが、双鉤して石版に、もしくは木版に一度彫ったの
ち拓に取る。ただし、原帖そっくりでなく、改行や印の位置を変え
る場合もあります。これは三希堂などを見ると、蘇東坡の作品など
は長くなるので、途中で切って次の行に改行しています。そういう
ことを指していると思います。形式、内容は3種類あって、単帖は、
『十七帖』のように内容が1種類のもの。専帖は、顔真卿や王鐸の

拓本のように、一人の書家の書蹟を集刻したものです。集帖は、『淳化閣帖』とか『三希堂法帖』のように、複数の法帖を広く取って集め刻したものです。集帖には、官刻と私刻があり、国が作ったものが官刻、個人の作家が自分の趣味に合わせて集めたものが私刻です。南唐の李煜の『昇元帖』が最古と言われましたが、真偽不明のため、現在では『淳化閣帖』が最も古いとされています。

『淳化閣帖』は全10巻。内容は、宋の太宗が淳化3年(992年)に内府所蔵の歴代墨蹟330種を摹勒上石させたもので、いわば唐代までの歴代書蹟名品集成です。まず第1が漢の章帝や晋の武帝など歴代の帝王の書、それから第2～4までは、漢の張芝や魏の鍾繇ら歴代名臣の作品です。第5は歴代の古法帖、懐素とか張旭といったその他の古法帖がこれに当たります。残りの5冊は、6～8の3冊が王羲之で154帖。9、10は王献之で70帖の作品が刻されています。つまり『淳化閣帖』全10巻の中の半分は、二王の書で占められたということは、当時いかに二王が尊重されていたかが分かり、また時代の好みや、宋の太宗の好みに合致していたかも分かります。

次に『三希堂法帖』ですが、正式には『三希堂石渠宝笈法帖』と言います。全32巻で、原石は、北京市北海公園内の閱古樓にあります。北京に行かれた方は、閱古樓にも行かれたと思います。建物が全部『三希堂法帖』で埋められているのです。現物が見られますので、今度中国に行かれたときはぜひ見てほしいと思います。魏の鍾繇から始まり、明の董其昌に至る134人の書蹟340種を刻しています。「三希堂」という言葉ですが、三希堂とは、北京の故宮の養心殿の中にある部屋の名前です。乾隆帝が、王羲之の『快雪時晴帖』、王献之の『中秋帖』、王珣の『伯遠帖』の3帖を持っていたので、非常に世の珍しい宝であるとして、三希堂の名前の由来になりました。

古典の臨書とは、自分の書の欠点を正し、骨格を作っていくことです。どんな古典を選択したら良いのか。幸い今は古典と呼ばれる書、資料は、印刷物で非常に鮮明に読めますので、臨書するには最高の環境だと思います。何を選択するかは臨書する人の選択で良いと思いますが、師に相談するのも一つの方法です。先生を大いに利用しましょう。

私が自身のために、古典の法帖を選ぶとすれば次のように考えます。まず顔真卿と唐の三大家。三大家の欧陽詢は『九成宮醴泉銘』を書いた人です。次に『孔子廟堂碑』を書いた虞世南、そして『雁塔聖教序』を書いた緒遂良です。時代が下がって、これに顔真卿「麻

姑山仙壇記」の書を対照にすれば、比較的やりやすいと思います。それから宋の三大家。蘇軾（蘇東坡）と、黄庭堅（黄山谷）、米芾（米元章）です。さらに個性的なスタイルが確立されています。臨書の対象には十分な名品ですから、後半になってくると文字の点画や表現方法が、くせという雰囲気になって分かりやすいものがあります。慣れている人は入りやすいでしょう。

誰の作品を臨書の手本にするかは、初心者であれ、相当上位の人であれ、その人の力量に見合うというか、書の中に教えを内蔵していることが望ましいと思います。初級の人には初級の姿を、上級者にはさらに内蔵している点画を教えてくれると思います。実は、唐の四大家や宋の三大家も、当時の古典を研究して、特色のあるものを作っていたのです。

唐、宋以前の古典というと、魏の鍾繇と東晋の王羲之、王献之になると思います。時代は、唐、宋、元、明、清と続きますが、自分が好きな書家が研究の対象にした古典を勉強するのは何よりも必要でしょう。例えば、唐の欧陽詢が何を見てああいう書を作ったのか。蘇東坡は何を見て稽古をして、ああいう作風になったのかということを知ることです。

明末の王鐸は、米芾の臨書をよく研究していました。王鐸の行書は、米芾の行書によく似ています。『寧楽堂選集』に王鐸の臨書集が3巻あり、その中に米芾の専帖『英光堂帖』が入っています。これを見ると、王鐸が米芾にいかに関心していたかが分かります。このくらい似ないと、本当に勉強したとは言えないのではないのでしょうか。王鐸は羲之、献之を研究してあのような書風を生み出したとも考えられますが、米芾に近づくには、米芾が勉強したものを研究する必要があったのかもしれない。米芾が羲之、献之を徹底的に学んだということなのですが、つまり、米芾に近づくには、羲之、献之をやらなきゃならないことを悟って、それを極めたのですね。

書の美を理解するためには、古くからの優れていると言われる幾多の書を美の基準としなくてはなりません。それらのものに絶えず接し、いろいろ美しい部分を見出し、抽出して記憶にとどめ、書に対する美の意識を高めなければなりません。理屈は分かっていますが、実際に自分で手に染めて法帖を臨書していく努力が必要です。今の学習だけではこれからの進展はありません。行動には意思の強力な後押しがあってこそ初めて可能です。ぜひともそう考えて、作品に構成を与えていただきたいと思いますとお願ひして私の話を終わります。